



京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業などを行う「京(みやこ)まなびミーティング」。  
第30回となる今回は、「アスニー ゴールデン・エイジ・アカデミー」でもご講演いただいている、  
森 清顕先生の講演を動画として配信します。

**講師** 京都市社会教育委員会議 委員 **もり せいげん 森 清顕 先生**  
清水寺執事補, 上智大学グリーンフケア研究所非常勤講師



**講演** 清水寺の紹介

■仁王門と基準点標石



清水寺の正面にお越しになりますと、仁王門のところに至るわけでございますけれども、目の前に狛犬(こまいぬ)がございます。清水寺の狛犬というのは、両方、口を開いているというのが特徴的なんですね。普通、「阿(あ)」と「吽(うん)」,「始まり」と「終わり」ということございまして、一つの対でございますけれども、ところが「阿」と「阿」になっている。これは、実は「終わり」というのは次の「始まり」でもあるということございまして。ですから「始まり」と「終わり」、そして次にまた始まるということ「吽」というのは次の「阿」と同じであるということ「阿」と「阿」ということで、二つ口を開いているということございまして。

ちなみにでございますけれども、戦争の時に、この狛犬は昔、銅製のものでございましたが、供出ということで、この狛犬がその時になくなりました。新たに狛犬を作る時に、また戦争が起こって、そうして「弾になっていくのはいかん」ということで、「今回は石にしよう」ということで、それ以降、石になったというような、そんな話がある狛犬でございます。

◆仁王門手前左手にある基準点標石について

こちらが清水寺の「仁王門」という場所でございます。正面の門前から上がられまして、一番最初に見えてきますのが、この仁王門という門でございますが、この門は、清水は長い歴史の中で何回も火災で焼けておりますけれども、応仁の乱のときにも丸焼けになっております。その後に再建しました建物が、この仁王門という門でございます。この門は、その後がありました1629年の江戸の大火災からは免れております。したがって、この境内の中のお堂の世代でいきますと、今現在の江戸の寛永の再建の一代前の建物が、この仁王門ということでございます。



この仁王門でございますけれども、皆さん通っていかれるんですが、実はこの仁王門の横にですね、意外に知られてないポイントと申しますか、ございまして、それがこちらでございますけれども。ここは、看板も作ってございますが、それこそ平成14年のものでちょっと古くなりましたが、国土地理院さんが建てられているということなんですが。なぜお寺に国土地理院の建てた看板があるのかと申しますと、ここに「地理寮(内務省地理寮。国土地理院の前身)」と書いてあるのですが、こちらの写真にもありますように、三角点の、いわゆる測量をする時の三角点の起点がこちらに、明治時代に作られたという、そのようなものでございます。

この門を解体修理いたしました時に分かったんですけれども、その前までは、ここまで実は埋まっております。私ら小さい頃なんか「なんで、これ、こんなあるんやろな」言うて遊んでたんですけれども。発掘といいましょうか、修復のときにこれを全部掘りますので、そうしますと下が出てまいりまして。ちょっと色が違いますけれども、下が出てきて、これは、要はカバーの石になっておりまして、横から「よっこいしょ」と、重いですけど取りましますと、三角形のてっぺんがこのところに出てきます。そこから測量をして、測ったというようなことでございます。

ちょうど明治8年のときにできてるんですけれども、ちょうど、この京都が明治維新になって近代化していく中で、この基準点がここに作られていったと。

なぜ、このお寺に作ったかといいますと、お寺ですから、そうそう移動することがございませんので、必ずここにずっとあるであろうということで、この基準点が作られているということでございます。



ですから、お参りにお越しになったときに、この仁王門を御覧になりながら、ふと、この左手、ちょうど門を正面にして左手にこれがございまして、明治の京都の活性化、明治天皇さんが東京にいかれますけれども、その後の京都を活性化していくための、地図を作ってというような近代化の基礎作りの一つとなったものでございます。また、こちらもお覧いただいたら楽しいかと思えます。



## ■西門と三重塔

### ◆西門



こちらは西門（さいもん）というところへ参りました。この門は、本来は勅使門（ちよくしもん）という門でございまして、天皇さんのお使いが通られる門ということでございまして、大変、絢爛豪華な造りの門でございまして。

ちょうどあちら側に先ほどの仁王門という門がございましてけれども、あの仁王門は応仁の乱の後にできたものでございまして。こちらは江戸の火災で焼けたので、江戸の再建のものでございまして。ここは、実はこちらの真正面に御所が見えていたわけでございますが、目の前の、先ほどの仁王門でございましてけれども、仁王門、赤いので赤門とか仁王門という名前があるのですが、別名、もう一つ俗説でございまして「目隠し門」という、そんな名前が付いております。と、いいますのは、ここから御所を見下ろせたということでございましてから、「見下ろすというのは大変不遜なことや。」ということで、あの門で目隠しをした、というような、そんな言い伝えのある門でございまして。



また、ここからですね、実は西山がすっきりと見えるんですけれども、この西山の一番高いのが愛宕山という山でございまして、皆さん御存じの愛宕神社さんでございまして。火伏の神様がおいででございますが、あちらのお山がここから真正面に実は見えるということでございまして。この愛宕山のお山から見下ろしていただいている、この愛

宕山の神様が、実はこの清水にも一箇所面白い影響を及ぼすといきましょうかね。そういうところがございまして、ちょっとあそこの愛宕山のことを、お参りに来られましたら、「ああ、あそこに愛宕山があるな。」と、このあと御案内します瓦があるんですけども、その瓦が実は愛宕山と関係をしてくる、というようなこととございます。



この門はですね、いわば勅使門と申しましたが、本来そうであれば勅使門といえよいのですが、ここは西門という門として一般的に広まっています。それはまさに浄土教の教えのなかで日想観（にっそうかん）という修行といひましようか、観法※がございまして。この正面の西山に太陽がずーっと沈んでいきます。このお日さん沈みませぬ時に、西山にゆっくりとお日さんが沈みませぬ時に、皆、手を合わせてですね、極楽浄土を思われ、そして手を合わされた、そういうふうな場所で「西」の「門」という名前で「西門」という、そんな名前が付きまして一般的に広がっていったというような場所とございます。



もし、お越しになるタイミングが夕暮れの頃でございましたらば、是非とも日の入りの時間をちょっと調べていただきまして、こちらへ来ていただきますと、ゆっくりと西山にお日さんが沈んでいきます。沈みませぬら、すぐ真っ暗に、当然ありませんので、山のちょうど沈んだ反対側が光り輝くようになっていきながら、だんだん真っ赤な夕暮れになっていきます。そうしますと、この西

山の向こう側に、まさに極楽浄土が光り輝くような、そんな場所があるようにも見えるわけとございます。皆さんここで、そうして手を合わされておったというような、そういう意味では勅使門だけではなく、あの世とこの世との連帯感のある、死者との連帯感のある、そういうふうな場所、というのがこの西門という門とございますので、ちょっと門としては特殊な場所というようなことともあるわけとございます。



※観法：仏教において広く実践され、森羅万象のありようや自己の存在をある哲理に即して見極めたり、仏や浄土のありさまをありありと目の前に想い描いたりすることで悟りの境地に至ろうとするもろもろの修行のこと

#### ◆愛宕山と瓦の関係について



こちらの三重塔の瓦とございますが、御覧のとおり、この一角だけ全て龍の鬼瓦が付いております。四方は本来、鬼瓦なんです、この角だけが龍なんです。これは先ほどの愛宕神社のあります、愛宕山から見ますと、この角っこが一番遠い角っこに当たります。したがって火伏せの神様の目が届きにくい、ということで、ここは龍の瓦を置きまして、水の精を置きまして火が出ないように、まじないとしてこちらに龍の鬼瓦を置いているということとございます。

## ■轟門



こちらがですね、轟門（とどろきもん）という門でございます。ちょうど本堂に入る直前の門でございます。この門は今回の平成20年からの改修の対象で、この門も改築改修、半解体修理をいたしました。今回のこの門の面白いのは、下を見ていただきますと、ちょっと木が違うんですね。これは実は「根継ぎ」という工法で継いであります。

実はこの建物は、江戸の地震の時に地盤が崩れまして、ちょっと傾きました。当時、昔の文献なんかでは、木を下から入れてジャッキアップみたいにしたたり、石を入れておったようなんですが、最終的に柱を切りまして、全体的に低くして、少しもたせていたようでございます。

そのまま、今現在まで来ておったんですが、今回、この半解体修理をするときに地盤をきちっと確認をしまして補強もしましてですね、「元の高さに戻そう」ということで、その江戸時代に切られた分だけ足しまして、四方全ての柱に足しまして、この上に柱を乗っているような形でございます。

ちょっと分かりにくいんですが、この柱（上側）よりこちら（下側）は少し大きい木が使っております。というのは、木はだんだん経年しますと、縮んできます。したがって同じ太さの木にしますと、継いだ方だけが小さくなってしましましてですね、隙が出てしまいます。したがって上よりも下の方が大きい木を使うというのが常でございます。大きい木を使って、これから先の縮小も考えての根継ぎをしていく、ということでございます。



実は、この根継ぎはですね、本堂の柱も今回は根継ぎをしております。本堂の柱は、ちょっと奥なので見えにくいんですけども、実はそういう工法で今回の修復をしているということでございます。

## ■本堂手前



本堂のところまで参りました。今、こちら屋根を御覧いただきましたら、これもちょうどこの令和2年3月に修復が終わりましてところでございますが、いわゆる檜皮葺（ひわだぶき）という屋根でございます。檜（ひのき）の木の皮を一枚ずつはがしまして、それをカットしまして重ねていくというような、そんな屋根でございます。この屋根でございますけれども、檜皮（ひわだ）は留めるのには竹の釘を使いまして、その竹の釘で刺していくと、そんなことでございます。広さが約600坪、なんか坪数でいうとなんかあれですけどもね、2,000平方メートルみたいなものではないでしょうか。なかなか広い大きさでございます。それを、一枚ずつ貼り合わせていくという大変長い年月のかかる作業でございますけれども、今回、この屋根が修復されました。

この屋根でございますけれども、清水の舞台の特徴は、この屋根の膨らんでいるところと、反っているところが両方あるというのが特徴的でございます。「膨らみ」と「反り」という、この二つを四方の線で作っていく、要するに四つ角を全部それにするというのは大変難しい業でございます。棟梁が一人の棟梁でないと、こちら東側だけはこの人、西側はこの人なんていうふうになりますと、やはり若干違ってくるんですね。同じ棟梁が一つずつ角度を合わせていくという、この技術も大変貴重な伝統技術でございます。

また、今回、上の鬼瓦でございます。ここから映像で見ましたら、そんなに大きく感じないかもしれませんが、あの鬼瓦も1mを超えているような大きさの鬼瓦でございます。大きな大きな鬼瓦でございますが、今回修復しますときに調査をしまして江戸時代の寛永の再建時、1633年に再建された当初の瓦なんです。今回は少し修復をしましてもう一度、上に上げるということでございます。



檜皮はだいたい40～50年に一度の張替えでございまして、よほど何かがない限り、また40～50年後まで、とりあえずは、あの瓦が現役で頑張ってくれるというようなこととございまして。大変大きな鬼瓦でございまして。無事にこの修復が終わりまして、是非とも清水にお越しになったときにはですね、稜線の美しさというものを少し見ていただいたら良いかなと思います。

今回の本堂の修復でもう一つの見所といいたしましうか、この切妻の金具でございまして、金色に光っておりますが、実は寛永の再建のとき、1633年の再建の時はこのような形で作られておりましたけれども、それ以後、この金物につきましては修復がされておりました。

今回の修復で一度、「寛永再建当時の形に戻そう」ということで、この金具にですね、箔（はく）を付けまして、このようにキンキンキラキラな感じとありますが、箔が付いております。今まで清水にお越しになりまして、この金物の、この屋根のところにこんな金箔の様子というのは今までございせんでしたので、お参りに来られましたときには、是非とも、再建当初の姿でございまして、こちらも見所として見ていただいたらありがたいです。

## ■舞台



清水の本堂へ参ったわけとございましてけれども、今現在おられますのが「舞台」でございましてけれども、この舞台の欄干、見ていただいたら真っ白の木とございまして。実は、今回ですね、修復の大きな工事の一つにこの舞台の板の張替えというのがございまして。

この、今おられますのが「下段」という場所なんです。上・中・下という3段に分かれて、この板が葺（ふ）かれております。この上・中・下段、3段と、そしてこの欄干の木を全て交換するという工事とございまして。この「上・中・下段」3段、だいたい166枚の板が使用されております。この床板は木曽の檜（ひのき）、木曽檜を使ってございまして、欄干は吉野の檜を今回は使用してございまして。まだ白木のきれいな状態とございまして、是非ともお越

しになりましたら、この景色は本当にそうそうありません。欄干を交換したのは、平成元年以来です。平成16年にこの下段と中段だけは張替えをいたしておりますが、上・中・下段そして欄干全てが新しくなるのは、その平成元年以来とございまして。

大体、この張替えというもの、舞台の張替えは、雨に濡れますこの場所は、15年に1度ぐらいのスパンで交換をしております。全体的には、やはり30年に1度ぐらいは、替えていかないと、というようなこととございまして。

やはり一番、この舞台の構造の中で気を付けないといけませんのが、板と板の間なんです。間に砂ぼこりなんかが入ったりしますと、そこにだんだんと水を含みます。そこから腐りがでてきますといけませんので、隙間のお掃除というものであったりとか、そういうふうなものもいろいろと気を付けてやっているということとございまして。

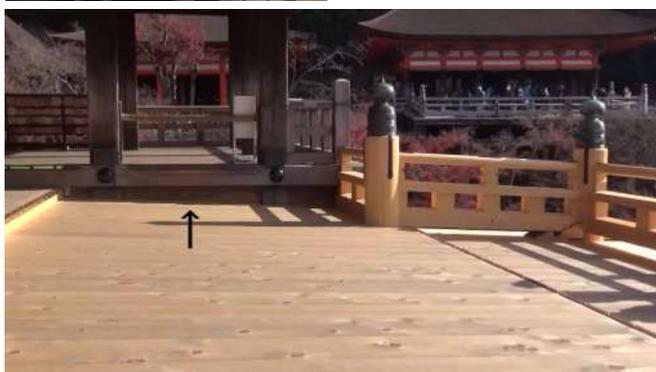


舞台は新しくなりましたがけれども、この擬宝珠（ぎぼし）だけは昔のままでございまして。お越しになりましたら、ここに寛永10年という刻印とございまして。寛永10年11月という日付が入っております。要するに387年ほど前の擬宝珠ということとございまして。まだ木は新しいですけれども、江戸時代の擬宝珠ということと、真っ白の白木の間にお参りいただいたら、この景色も30年に1回ということとございまして、どうぞ新しい舞台を、また見ていただければありがたいです。



清水寺の本堂はこの舞台造りをしておるんですけども、本堂を舞台というふうに、通称、言います。本堂というのは拝む場所、舞台というのは舞う場所ということで、実は用途が全く違うものでございます。その二つの用途を一つにしたのが、この清水の本堂・舞台という建物でございます。

来ていただきますとわかりますのが、舞台側は四角い柱を使っております。この辺りなんかは四角ですけども、本堂は丸い柱を使っております。したがって四角い柱の部分がこの舞台の場所、丸い柱のところ为本堂の場所ということでございます。



今、おりますここが、舞台でございます。ステージでございます。ここの、屋根のあります、反対側にもあるんですが、この両方が楽舎（がくしゃ）といいまして、いわゆるオーケストラボックスなんです。楽を奏でる、そして舞台上で舞を舞う。その舞台の客席というのは、仏様だけというスタイルの舞台でございます。

したがって、この南側に広がります山を背景といたしまして、舞う演者の奉納を仏様が御覧になるという、こういうふうな舞台ということでございます。したがって我々人間が舞を見ようとしますと、逆に柱が邪魔になりまして、舞台の中央に立ちますと、真正面に仏様のお顔が実は見えるというように、この舞台は作られております。若干のこの傾斜が、水はけもあるんですが、仏様から見える世界が、人の姿がきっちり見える。そこもおそらく考えられて、この傾斜も作られているのではないかと、思うわけでございますが、そのような舞台が、この清水の本堂・舞台という場所でございます。



奥の院でございます。左側は彩色がありますが、右側の組物（くみもの）には彩色が施されておられません。これは、今回、修復しましたときに、現在の修復と、以前の状況が保存状態がよいので、そのまま残してあります。

したがって、次にこの色の修復をするときに、現在の修復とその前の状況が対比できます。これによって、この先、またいろいろ研究が進んでいく中で、もう少し、どういうふうな状況にこれから研究、修復がなっていくのかとか、いろいろその先のことを考えて、以前の彩色のものを、わざと残しているということでございます。

こういうちょっとした違いがありまして、こういうところも、来られてもあまり上をこう、見ることもひょっとしたらないかもしれませんが、少し見ていただきますと、こういうふうな違いが所々にあったりいたします。



## ■ 経堂

### ◆ 清水寺について



清水寺は京都にお住まいの方でしたら「清水さん」とか親しみを込めて言っていたりしておりますし、修学旅行の学生さんがお越しになったりということで、大変、親しみをいただいているお寺でございますが、このお寺は778年に建立されたお寺でございます。ちょうど794年に平安京が出来ておりますから、その少し前に出来ております。

このお寺に住んでおりました仙人みたいな方で行叡居士（ぎょうえいこじ）という方がおられました。この方がここにお住まいをされておりました。

あるときに奈良の子島寺（こじまでら）というお寺の延鎮（えんちん）さんという和尚さんが夢を御覧になりまして、「あなたを待っている人がいるから、光る水があるから、それを手掛かりに行きなさい。」と、こういうふうな夢でお告げをいただきまして、この延鎮さんがその水を求めて北へ上がりながら、それをいずれ見つけて、そしてその源に参ります。その源におられたのが、行叡居士ということで、行叡さんは「あなたを待っておった。これから志あって旅に出るので、この観音様の霊山と、この湧き出す金色に光る金色水、観音様の化身のこの水をあなたに託して旅に出る。」ということで、本当に旅に出られまして、その後を延鎮さんが、このお寺を守られるということになります。

そうしますと、暑い日のことでございます。一人の武将が鹿狩りに上がって参りますのが坂上田村麻呂公でございます。奥様のために鹿狩りに上がりましたが、鹿を捕りまして、暑いときでのどの渇きがございますので、水のよいものが流れておりますので、どこが源かと思い、訪ねられましたところにおられたのが延鎮上人（しょうにん）でございます。延鎮上人が、この山は観音様の霊山ですから殺生はしたらいけない場所であることを告げられまして、そこで観音様や仏教のお話に田村麻呂公が触られるということ

でございます。その鹿は葬りまして供養をされたということでございます。後に田村麻呂公が住まわれておりましたお屋敷を移築いたしまして、そしてお寺らしきものが出来ていきます。

次は桓武天皇から征夷大將軍として東北に平定に行くように命を受けます。田村麻呂公もそれで参るわけでございますが、しかしながら、なかなか決着しません。向こうのリーダー、阿弭流為（アテルイ、大墓公阿弭流為または阿弭利為とも）と母禮（モレ、盤具母禮）二人の首を持ち帰るという任務なんですけど、なんと、この二人を連れて帰ってきません。本来は平定をするということですから二人の首を持って帰るのが仕事なんですけれども、生かしたまま連れてきます。ある意味、命令違反ですね。そして、田村麻呂公はこの二人を助けてほしいと嘆願をいたしまして、田村麻呂公も自分の生命を懸けた行動に出たわけでございます。朝廷は残念ながら、阿弭流為と母禮の二人の首をはねるという結論を下してしまい、田村麻呂公の思いは途絶えまして助けることはできなかった。そして田村麻呂公は大変、悲しみの中にあるわけなのですが、この二人そしてたくさんの方が亡くなっておりますので、その方々の菩提（ぼだい）を弔いたいということで建てられたお寺がこの清水寺というお寺でございます。「清水さんはなんか田村麻呂公らしいで。」というのは御存じなんですけど、この清水寺の草創というのは、意外に知られていないところでございます。



この御本尊様のお話をいたしますと、この場所は経堂（きやうどう）という場所でございます。普段は外側からしかお参りできない場所なんですけど、こちらのお堂は御本尊様はお釈迦（しゃか）様でございますが、清水寺の御本尊様は千手観音様ということでございます。清水型千手観音といいまして、頭の上に手が一組上がっている、ちょっと独特なお姿の千手観音様でございますが、この観音様でございますけれども、先ほど申しました清水の歴史を振り返りましたときに、行叡居士、延鎮上人、そして田村麻呂公を引き合わせましたのも、この金色水と



いわれるお水、湧き水でございます。この湧き水でございますが、清水では音羽の滝の水でございますが、この水は観音様の化身として我々は受け止めているわけでございます。といいますのは、観音様というのは姿形を変幻して人々を助ける、そういうふうな仏様でございます。お水というのは四角い器に入れましたら四角にもなりますし、丸い器では丸くもなるということで、水にも気体にもなります。いわゆる水というものも変幻自在な液体なんですね。身近にある液体ということでございます。したがって、お水を昔から観音様の姿の変容というものと捉えまして、この水を観音様の化身として受け止めておったというわけでございます。

#### ◆清水寺の由来について



「きよみずでら」というお寺でございますが、どうもお謡なんかでは「せいすいじ」と謡われておりますので、おそらくは「せいすいじ」と昔は言っておったんだと思いますが、「きよみずでら」という名前で広がります。これにも理由がございまして、全国に「きよみずでら」もしくは「せいすいじ」というお寺は約80軒以上あるんですね。あるんですが、1軒も「しみずでら」というのはないという特徴があります。おそらくですが、和読、訓読で「きよみずでら」となるんですが、そこで「しみずでら」と言わなかった理由がおそらくある。それはですね、水が湧き出しておりますので、湧き、出(いだ)す水、滲(し)み出す水ということで「しみず」となるんですが、これは単なる水が湧き出すということでございます。しかし、お水

が先ほど言いました観音様の化身ということで、この水に対して信仰であったり、仏様の力を見るところでございます。したがってこの水によって我々は清められるんだということで、しみ出す水ではなく、清める水ということで清め水というようになります。したがって清め水から清水寺(きよみずでら)という名前に変化していくわけでございます。ですから、全国80何軒ありますけれども、1軒も「しみずでら」がないというのも面白いことでございますが、この清水寺という名前の由来もお水の観音様の化身というふうなところで受け止められているということでございます。

この清水寺の境内全域でございますが、舞台の景色であったりとか、伽藍(がらん)、滝が流れたり山があって、そして鳥が鳴いたりなんかします。秋には紅葉、そして春には桜なんていうふうな四季折々の大変美しい姿がございます。平成20年度より、この清水寺の境内の国の重要文化財8棟と国宝の本堂の1棟、合計9棟の解体・半解体修理が行われました。大変長い工事でしたが、ようやくこの令和2年度で全てを完成することがおかげさまでできることになったんですが、その折々の文化財の伝統技術というものもございまして、この動画の中にも少し触れさせていただいておりますけれども、そのような昔からの伝統技術がこうして受け継がれているということでございますが、この清水寺の境内、今申しました音羽の滝、そして舞台、山々の木々なんていうものがございます。これは、実はある計算をされて作られたものとも言えます。と言いますのは、この観音様のお浄土というのが補陀落(ふだらく)浄土という浄土でございます。お経の中には補陀落浄土という場所、要するに観音様の住まわれている場所というのが、まず岩の上、岩上にあり、楼閣造りをしている。そして水が豊かに流れ、木々が育ち、花が咲き、鳥が飛んでいるような世界が観音様の補陀落浄土という世界とお経の中で説かれております。この清水寺のランドスケープと言いましょか、その景色は、実は正にそのお経に書いてあります観音様の浄土を



具現化しているのが、この清水寺の境内そのものということでございます。16世紀に作られました参詣曼荼羅（さんけいまんだら）というのがございますが、お参りに来られている方、そして茶店でお茶を飲んで楽しくしゃべっている方々やまち中の生活の様子まで含まれて一つの大きな絵になっております。この参詣曼荼羅という言葉自体は昭和30~40年代に出来てきた学術用語でございますが、正にその日常生活を含め、手を合わすというこの世界が実はこの清水の観音様の浄土そのものなんだという視点で描かれているということでございます。

#### ◆新型コロナウイルスについて

観音様というのは大変身近な仏様ということでございます。人々の悲しみ苦しみに寄り添う、そのような仏様でございます。昨今、この新型コロナウイルスで大変不自由な、心苦しい生活、今までと違う生活が続いております。我々お寺もいろいろな対応を考えながらさせていただいております。幸い、お寺は野外の場所が大変多くございます。このコロナというのは、いつ自分が無症状でかかっているかもしれない、そしてまた他の方にうつすかもしれない、という目に見えないものでございますから不安なところがございます。このコロナというのは私たちに何を教えているのだろうと考えますと、相手の命を慮（おもんばか）る行動をしないといけないというのがあってはないかと思えます。いわゆる不顕性感染という私たちに症状がなく無自覚なままで相手の方にうつすかもしれない。そういうこともございますので、常に自分の命も当然でございますが、他者の命を慮る行動ということを考えなければなりません。今まで言葉としてはずっと言われたりはしてまいりました、しかし実際に我々が行動に移さなければならぬという切羽詰まったところでございますけれども、そういう思いを持ち、改めて考えて行動しないといけないという時代に来ているのではないかと思うわけでございます。やはりそうした思いを持って我々のこれからの生活、行動というものを考え、そしてこの思いが日本のみならず世界に広がっていくことで、他者の命を慮るというその思いが世界に広がっていけば、新型コロナウイルスだけではなく、その他の文化であつたりとか平和というものにもつながっていくのではないかと考えるわけでございます。お寺も幸い野外のところが多くございますので、お家にいるということも一つなんですけれども、少人数であつたりとか、許される現状に

おいて散歩がてらにふらっとお近くのお寺に行かれたりとか、神社であつたりとか、そういうところで少し気分転換をしながら生活をしていくという、そういうふうなこれから生活態度というものも一つになってくるのではないかなというふうに思うわけでございます。どうぞ、申しましたけれども、新型コロナウイルスの大変な中ではございますけれども、皆様の生活、そして、亡くなった方々、このウイルスが早く終息することを、切に清水寺としましても常日頃の御祈願としてさせていただいているところでございます。どうぞ御身を大切にいただきまして、お過ごしいただきますことを願っております。どうもありがとうございます。

